

<シンポジウム 24—1>創薬研究を推進するためには何が必要か？

急がば回れ：臨床研究医の厚い層の育成は、 将来の創薬研究を支える

福原 俊一

(臨床神経 2011;51:1083)

Key words : 臨床研究, アウトカム研究, 臨床疫学

日本の医師のキャリアパスは、従来シンプルであった。医学部卒業後、ほとんどが母校のどこかの講座に所属し、講座医局の方針にしたがって臨床経験を積み専門医になる。同時に研究に従事することも義務の一部であり、学位を取得する。その場合の研究とは、基礎実験室研究を指すことは自明のことであった。医師の評価は、定量評価が困難な診療、教育ではなく、研究業績をもって行われてきた。学位取得後のキャリアは、大学教授、講座医局の関連病院で勤務医就職、開業などの道に分かれる。厚労省や企業に入る者もいる。

ところが2004年に導入された卒後研修必修化を契機として事態は大きく変わることとなった。もっとも顕著な現象は、医局に入らずに市中病院に研修先を選択し、その後大学になかなかもどろうとしない医師が現れてきたことである(若手医師の約半数)。いよいよ、講座医局中心のsingle career pathからmultiple career pathが出現したわけである。最近のわれわれの調査では(厚労科学研究 2009)大学にもどりたい理由は様々だが、「自分の意思に反する研究をさせられる」というのが少なからずあった。創薬研究も若手医師からそのようにみられないことを祈るばかりである。逆に筆者らが驚いたのは、この調査の回答者の80%以上が、研究にも大きな関心を持っていることであった。ただし彼らが関心を持つ研究は、基礎実験研究よりもむしろ臨床研究であることも明らか

になった(日本医事新報 2009)。演者は、臨床医として腕を磨こうと市中病院を研修先に選んだ医師は、大学に残った医師同様、知的好奇心に富む者たちであり、しかも臨床現場でみている患者のアウトカムを少しでも改善したいという向上心に富む者たちであると確信する。ぜひ医学研究にも貢献してほしいものである。

さて、神経学専門医がおこなう臨床研究はどうあるべきだろうか？臨床研究は、ともすると臨床試験、translational researchと同義とみなされがちだが、「(動物実験と同じことを人間の検体を使っておこなう研究(!))」と考えている方さえおられる。臨床研究は広範な研究領域を包含している。たとえば毎日の診療の中で思いつく素朴な疑問(Clinical Question)を題材にした研究も立派な臨床研究である。この疑問をResearch Questionに構造化し分析的な研究を行うことにより、その結果を、診療や政策に還元することも可能である。今回は、「なぜ、今、臨床研究なのか」「臨床研究の本質は何か」という原点にもどり、これを画に描いた餅に終わらせず、具体的な形に可視化するための戦略を皆さんとともに考えたい。また臨床研究の何をどうやって学習するかについても触れたい。

最後に、京都大学医学研究科で、6年前に演者を中心に試験的に開講したMCRコースの内容とささやかな実績についても触れたい。 <http://www.mcrkyoto-u.jp>

Abstract

Nurturing clinician investigators is the best way to innovative drug development from academia

Shunichi Fukuhara, M.D.

Department of Epidemiology and Healthcare Research, Kyoto University Graduate School of Medicine and Public Health

(Clin Neurol 2011;51:1083)

Key words: Clinical Research, Outcome Research, Clinical Epidemiology